

67号
2024年
冬

赤れんが通信

札幌国際芸術祭 2024

JET スポットライト：ドゥゲルジャブ・ノミンチメド（滝川市 CIR）

北海道

www.pref.hokkaido.lg.jp

赤れんが通信（英語版）は、北海道庁国際課の国際交流員ヘンリクソン・アルミが執筆しています。

札幌国際芸術祭 2024

美しい札幌の街は、毎年恒例の大きなイベントに事欠きません。踊り子たちが元気いっぱいに舞うよさこいソーラン祭り、美味しい食べ物に舌鼓を打つオータムフェスト、そしてもちろん、巨大な雪像を楽しめる我らが雪まつり…挙げればキリがありませんね。今回の赤れんが通信では、3年に1度しか開催されない、もう少しレアなイベントをご紹介します。コロナの影響により6年半もの長い年月を経て、ようやく札幌に帰ってきた、札幌国際芸術祭（SIAF）です。

ある日突然、札幌の街中を埋め尽くした SIAF2024 のポスターですが、私の目を引いたのは、ポスターに書かれているアイヌ語でした。アイヌ語は北海道の先住民族であるアイヌ民族の言語で、和人が進出する遙か前から存在する言語です。それにも関わらず、近年では使用者がほとんどいなくなってしまう、アイヌ語はすっかり身を潜めてしまっています。そんな事情があったので、日本語と英語に加えて、このイベントのアイヌ語の名前（Usa Mosir un Askav utar Sapporo otta Uekarpa）を見つけられたことが、私にとっては嬉しい驚きでした。



▲ 《Pinnannousu》（Jussi Ängeslevä + AATB）



提供：札幌国際芸術祭 2024

SIAF2024 のテーマは、LAST SNOW です。さらに、このイベントには、それぞれ異なる言語で 3 つのサブテーマがつけられています。日本語では「はじまりの雪」、英語では「Where the Future Begins」、そしてアイヌ語のサブテーマ「Upaste」は、「雪」を意味する「upas」と「気づく」という意味の「paste」を合わせてできた言葉です。「upas」という単語も、そもそも「u（互いに）」と「pas（走る）」という 2 つの単語の組み合わせで、空を舞い落ちる雪が互いに競っているように見える様子を表したものです。

All issues of The Red Brick Bulletin can be accessed at https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/tsk/akarenga_eng.html

Published by the International Affairs Division, Department of Policy Planning and Coordination, Hokkaido Government (Edited by Armi Henriksson)
ADDRESS: N3W6 Chuo-ku, Sapporo, Hokkaido, Japan 060-8688 PHONE: +81(0)11-231-4111 FAX: +81 (0)11-231-4303

モエレ沼公園

私の SIAF は、広大なモエレ沼公園から始まりました。眩しいほどに太陽が輝く 1 月のある日。私はサングラスを持ってこなかったことを心底後悔しました。モエレ沼公園はスキーやそり遊びを楽しむ人たちで盛況でしたが、私が目指していたのは、全く違う世界—Jussi Ängeslevä + AATB による展示《Pinnannousu》の世界—への入り口でした。



慎重な足取りで展示会場へ向かいます。入り口に看板もなく、得体の知れない様子が、なんだか不気味に思えたのです。この黒いカーテンの向こうでは、一体何が私を待ち受けているのだろうか？真っ白な雪景色と太陽の光、そして子どもたちの笑い声を背に、私は覚悟を決めて、カーテンの向こうに足を踏み入れました。

そこは暗い洞窟の中でした。不気味な音がこだましています。暗闇に目が慣れてくると、周囲の様子が少しずつ分かってきました。普段は雪貯蔵庫として利用されている大きな部屋の中に、それぞれ異なる溶け具合の氷の塊が置かれていました。氷の塊が、それぞれ床に向かって伸びるスポットライトに照らされると、その影には単に氷という以上の重要な役割が与えられます。展示会場の中心では、1つの大きな氷の塊が、まさにロボットアームで加工されているところでした。



▲ 《Pinnannousu》 (Jussi Ängeslevä + AATB)



「Pinnannousu」をざっくりフィンランド語から訳すと、「隆起する表層」となります。寒くて暗い展示会場にいる間、私は溶けゆく氷河の中に佇んでいるような感覚を覚えました。私の周りで響くチリンチリン、ミシミシ、という聞き慣れない音が、消えゆく氷の叫びのように聞こえてくるのです。真っ白な雪の世界に帰ってきた私の視界に、あらためて素晴らしい冬の日を楽しむ人々の姿が入ってきました。なんて儂い楽しみなのだろう。そう強く感じました。氷が溶ければ、雪もなくなります。私たちは、この雪や氷がある冬をいつまで楽しめるのでしょうか？

▲ 《Pinnannousu》 (Jussi Ängeslevä + AATB)

All issues of The Red Brick Bulletin can be accessed at https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/tsk/akarenga_eng.html

Published by the International Affairs Division, Department of Policy Planning and Coordination, Hokkaido Government (Edited by Armi Henriksson)
ADDRESS: N3W6 Chuo-ku, Sapporo, Hokkaido, Japan 060-8688 PHONE: +81(0)11-231-4111 FAX: +81 (0)11-231-4303

北海道立近代美術館

モエレ沼公園で物思いにふけた2日後、私は次なる SIAF の展示会場へと、氷で滑りやすくなった札幌市中心部を進みました。今回の展示の題名は、『1924-2024 FRAGILE [こわれもの注意]』。その名のとおり、私は芸術の100年の歴史をめぐる旅へ出ることになります。白黒写真、簡素な風景画、天井からぶら下がる巨大な刺繍の作品、そして抽象的な色彩の実験的な作品まで、幅広いメディアとスタイルを用いた作品に出会いました。文字通り「こわれやすい」作品ばかりだったことのほかに、私のような芸術素人は、それぞれの作品同士につながりを見いだすことにも苦戦しました。とはいえ、この展示の1世紀にも及ぶ時系列と、札幌国際芸術祭全体のテーマとのつながりは明白でした。我々はどこから来て、そしてどこへ行くのか、考えさせられる展示でした。



芸術祭との連携企画で、ちょうど同じタイミングで道立近代美術館において開催されていた別の展示も見てみることにしました。アイヌの芸術作品と工芸品の大規模な展示です。ここ数年間、私は北海道で暮らしていますが、地下鉄さっぽろ駅近隣の常設展示をはじめ、さまざまな場所でアイヌの文様を見かけたことはあったものの、あれほどの種類のアイヌの工芸品が一堂に会するところを見るのは、このときがはじめてでした。刺繍が施された布やアットゥシでできた羽織り物、装飾品や儀式に使う道具、立派な鞘に入ったナイフ、そして腕時計や笑いを誘うデザインの木製の像をはじめ、より現代風の作品なども展示されていました。展示の規模はあまりにも大きく、作品に宿る美しさと職人技を隅々まで堪能するには、かなりの時間がかかったと思います。このアートの旅もお昼までには終わるだろうと高をくくっていた私は、「おお～、すごい！」と作品に感動するのを足早に切り上げ、やむなく次の目的地へ向かいました。

未来劇場

過ぎ去った年月の中で生み出された芸術作品と、職人技の中に受け継がれてきた古くからの伝統に触れ、私の旅はさらにその先の時間へと進もうとしていました。次の展示のタイトルは「2124-はじまりの雪-」です。未来劇場については、実はほとんど期待していませんでした。私自身、この劇場に来たことはなく、SIAF開催に際して、いつもの「東1丁目劇場」(新しい名前に比べると、魅力に欠けますね)から名前を変えたということしか知りませんでした。

劇場は、全体が展示会場になっていました。建物の深層部まで歩みを進めるたびに、次から次へと鮮烈な作品に出会いました。はじめのうちに見つけた作品の中で、私のお気に入りには、Choe U-Ram さんの《Custos Cavum (穴の守護者)》です。2つの世界の間空いた穴を守る、アザラシに似た姿の守護者をモチーフにした作品です。氷に空いた穴が塞がらないよう、かじり続ける野生のアザラシの様子にインスパイアされた作品だそうです。私がもう1つ気に入った作品は、青木美歌さんによる美しく繊細なガラス彫刻です。ほとんどの作品が、胞子やウイルスを彷彿とさせる形状で、ビーカーやスポイトを突き破って成長しているような形のものもありました。これらの作品は、コロナ禍になるずっと前に発表されたものではありませんが、人間が自然の力から逃れられないことをあらためて教えてくれた、あのパンデミックを、私は思い出さずにいられませんでした。



▲ 《Refuge for Resurgence, Window View》 (Superflux)



▲ 青木美歌 札幌国際芸術祭 2024 での展示風景

未来劇場での展示全体を通して、私は何度も現れる1つのテーマに気づきました。地球、雪、そして気候変動。私たちはどこへ向かうのか？札幌に最後の雪が訪れるのは、そう遠い未来ではないのだろうか？将来はどこを切り取っても暗いように思えますが、いつでも希望はそこにあります。最後に、私が芸術祭を通して最も心奪われた作品についてお話しします。Superfluxの終わりを迎えた世界のその後の一場面を切り取った《Refuge for Resurgence, Window View》という作品です。見慣れた世界の一部が水没し、廃墟になってしまっても、生命は負けることなく、やがて新しいバランスを見つけるという様子を表現しています。

この原稿を書きながら、事務室の窓から外を見ると、雪が空から競い合うように落ちて来ています。この光景を見ながら思い浮かぶのは、芸術祭のアイヌ語でのサブテーマではありません。中谷宇吉郎博士という科学者が、こんな言葉を残しています。「雪は天から送られた手紙である」。

その手紙を読んでみるときが来たようです。



▲ 《雪結晶》（石井亨）



▲ 《In Motion》（後藤映則）

札幌国際芸術祭 2024

会期：2024年1月20日～2月25日

※札幌芸術の森美術館は2024年3月3日まで

会場：札幌市内各所

入場料：個別鑑賞券 1500円、パスポート
2700円ほか(無料会場もあり)

ウェブサイト：<https://2024.siaf.jp>



北海道 JET スポットライト



北海道には300人以上のJETプログラム参加者（外国語指導助手、国際交流員、スポーツ国際交流員）がいます。赤れんが通信では、こうした様々な国々からやって来た皆さんのストーリーを伝えていきます。今回は、空知地方の滝川市在住の国際交流員（CIR）を紹介します。



MEET NOMINCHIMED



▲ 滝川市の菜の花祭りの時、どこでもドア

簡単な自己紹介をお願いします。

初めまして。モンゴル出身のドゥゲルジャブ・ノミンチメドです。ノミンと呼んでください。初来日が25年前の1999年で、2004年に北海道大学を卒業しました。卒業してからずっとモンゴルで働いていましたが、2022年に滝川市の国際交流員として再来日し、現在2年目です。時間があれば自転車で町中や自然の風景を満喫しながら走るのが好きです。冬は自転車で走りませんが、歩いて散歩するのが好きです。自転車に乗ったり、歩いて街を散歩していると、思わぬところに面白いものやおしゃれな店があったりとたくさんの発見があります。

JETプログラムで日本へ来たきっかけは何でしょうか？

帰国してから、家族ができ、子どもにはいつか、日本の特に北海道の素晴らしい自然を見せたい、日本の文化や教育を体験させたいという思いがずっとありました。

英語圏などに比べて、モンゴルからのJET募集はわずかです。現役JET参加者は全国で3名しかいません。偶然、SNSに記載されていた北海道滝川市の国際交流員の求人掲載を見て、これはチャンスと思い応募しました。コロナ前の2020年に応募しましたが、新型コロナウイルスの水際対策で採用が何回も延期され、来日1日前に中止されたこともありました。2年越しでやっと2022年5月に家族と一緒に来日出来ました。

JET参加者としてどんな仕事をされていますか？

滝川市はモンゴルのウブスハンガイ県と友好交流があり、現在まで多くの研修生や技能実習生を受け入れて来ました。元々、その研修生などを取り扱うLGOTPという事業を担当する予定でしたが、新型コロナの影響でLGOTP事業が中止となりました。しかし、両国の学校間の交流、モンゴルへのランドセルや救急車、消防車寄付事業などを通して、今もモンゴルとたくさんの交流が続いており、それに関わる仕事をしています。日本ではモンゴル語を勉強したい人がわずかにいますが、そのような人のために、ユーチューブで初級レベルのモンゴル語講座の動画を、復習も含めて全19回投稿しました。また、滝川市及び周辺の富良野市、夕張市などの学校、児童館、保育所を訪問したり、イベントに参加してモンゴルの文化や遊び、料理などを紹介しています。

ノミンさんが経験した日本と自国の違いや共通点は何でしょうか？

モンゴルは日本と同じ北東アジアの国です。仏教、通過儀礼、文法、お相撲など文化的には日本と多くの共通点が見られます。特に北海道はモンゴルの北部と気候や自然が似ており、親近感があります。最も大きな違いは、モンゴルは遊牧民族の国です。モンゴル人は季節に合わせて、家畜と共に草や暖かい所を求めて住む場所を移動する民族です。家族単位で生活し、物事を個々で決めなければならないので、個人主義が強い人が多いと感じます。

これまでの北海道生活で印象に残っているエピソードを一つ聞かせてください！

北大生 のとき、寮の管理人のお爺さんがニセコなどに連れて行ってきて、地元の祭りなどに参加したことが最も印象に残っています。スノーモービルを体験したり、日本人のお宅を訪問したり、貴重な体験でした。



▲ 滝川市のランタン祭りの様子

滝川市、または空知地方の好きなところは何でしょうか？

自己紹介で述べたように私は、自転車で色々な場所を回るのが好きです。滝川市はもちろんのこと、周辺の赤平市、砂川市、雨竜町、新十津川町などのほとんどの街を自転車で回りました。滝川市も含めて中空知地方は緑に囲まれた自然豊かなところですよ。夏は自転車でサクランボ狩りに滝川市郊外の農園へ行ったり、美味しいアイスクリームを食べに砂川市郊外の牧場などに行ったりしました。また、滝川市はスカイスポーツが盛んな街です。市内にある「たきかわスカイパーク」からライダーで空を飛ぶことが出来ます。2月に行われる「たきかわランタンフェスティバル」では、1万個以上の手作りの紙袋ランタンが街中を幻想的に灯します。5月には菜の花祭りがあり、丘陵地を彩る鮮やかな黄色の花を見るため、国内外から多くの観光客が訪れます。皆さんも、是非、訪れてください。

